

西暦 2023 年、戦争はいまだ繰り返されている。

ウクライナで進行中の戦争、ラテンアメリカ、チリ、アルゼンチン、アフガニスタンで近年勃発する一連の戦争、イラクでの 2 つの戦争、イエメンとシリアで続く数々の戦争。それらの戦争は、人類に計り知れない悲しみ¹をもたらすとともに、数百万人の難民を生み出している。人々から家と暮らしを奪い、彼らを「テントのひとびと」²へと変容させることで。命を奪われ、それゆえに「語る権利を奪われた」³人々の悲嘆、そ

¹ トロイア戦争の最後の 51 日間を描き、戦争がもたらす深い悲しみを語る『イリアス』より。

² パレスチナの詩人 Mahmoud Darwish マフムード・ダルウィーシュ（1941～2008 年）の詩「think of others」の 1 節「As you return home, to your home, think of others (do not forget the people of the camps)」より。

³ 同上。「As you liberate yourself in metaphor, think of others (those who have lost the right to speak)」より。

して武器によって引き起こされる全ての悲劇は言うまでもないが、一様に心に深い傷を負い、困窮し、過酷な環境での生活を強いられる人々の悲痛もまた、限りなく深い。テント村で、難民キャンプで、外国語の飛び交う見知らぬ土地で。その多くが、大切な人たちと数か月、数年も会えないままで。

戦争は、汚染物質をまき散らし、エネルギー消費を助長する、現代史上最も「非グリーン」な人間活動の1つだ。しかし、地位や職権を利シマスコミ操作に直接関与する人々は、この点をほぼ不問に付している。代わりに彼らは、その特権と知名度を使い、人々にこう呼びかける。「パスタをゆでる間は火を止めるように」。環境に対する責任とエネルギー節減という、それ自体としては非の打ちどころのない名目を掲げて。ただ平和的にスパゲッティを作ろうとしている人に不当に責任を負わせ、情報を与えないことで誤った情報を拡散する手口だ。

おそらく、あまり知られていないと思うが（だからこそ自身で調べてみて欲しい）、兵器が排出する二酸化炭素量を明確に特定するのは、平時であれ戦時であれ、簡単ではない。なぜなら、それらは公的な**汚染統計**に**全く含まれていない**からだ。考慮されることも、定量化も推計もなされていない（Amitav Ghosh アミタヴ・ゴーシュ著『The Nutmeg's Curse』2021年）。これを読んでいるあなたがたに尋ねる。「兵器が排出する二酸化炭素に関して、新聞やテレビで議論されているのを見たことがあるだろうか？」

キリストの誕生から 2023 年を経た今もなお、国内・国際輸送に使用される兵器（航空機、ヘリコプター、ドローン、戦車、装甲車、陸海空の輸送機関）や発動機など、交戦国の軍事装置が環境に与える影響、そして数千キロもの距離を輸送される大量破壊兵器の製造に関わる業界の環境責任といった点は、「グリーン」政策を支持する公人たちの関心事にはなっていないようだ。

「このうえ何を目にし、何に耐えねばならないのか。
祈禱者の顔をした残忍な戦争の悪魔たちよ。」

Franco Battiato フランコ・バッティアート

Come un cammello in una grondaia (1991 年)

(1945～2021 年：イタリアのシンガーソングライター、作曲家、映画監督)

色々なことがあるにせよ、出来る限り地元産のものを
選び、地域経済を支えようとする人々がいる。それは
ありがたいことだ。だが、彼らを含む現代人が、現下
に繰り広げられる戦争に資金を投じ続ける限り、その
ようなささやかな貢献は、世界が直面する危機に何の
解決ももたらさない。現在進行形の戦争は（トゥキデ
ィデスを読んだことのある人なら誰もが危惧するよう
に）長期化の様相を呈するが、この戦争もまた例外な
く、そして何よりも、惑星としての地球、生物と自然
環境を宿す1つの生命体としての地球、そしてそこに
息づく全ての生命およびその営みと敵対するものなの

だ。西欧式「開発モデル」の名において、それらは今に至るまで数十年もの間、加速的な残忍性をもって冒涇され続け、結果的に人類と自然のつながりは断ち切れ、その土地の住民が代々紡いできた文化と世界観は、あらゆる場所で破壊され続けている。

「民族を絶滅させるには、
彼らのルーツから取り掛からねばならない」

Aleksandr Isayevich Solzhenitsyn

アレクサンドル・イサーエヴィチ・

ソルジェニーツィン

(1918～2008年：ソビエト連邦の小説家、劇作家、
歴史家。1970年ノーベル文学賞受賞。

代表作に『収容所群島』)

先祖の代から今日まで、無知、情報不足、怠慢、無力さゆえに、私たちは地球に対する破壊行為に加担し続け、「上位1パーセントの富裕層が富の**99%**を占有す

る」(2012年「ウォール街を占拠せよ」運動のスローガン)という事態を現在まで定常化させてきた。

だが、私たちはもっとうまくやれるはずなのだ。だからこそ今、あなたがたに呼びかけたい。近くの人、遠くの人、すべての人の幸福のために。なぜなら、私たちは皆、風が運ぶ同じ空気を吸い、大地を流れる同じ水を飲んでいるのだから。しかしその循環を支えるアマゾンの熱帯雨林は今この瞬間も、生きながらにして焼き払われている。紀元1600年、ローマのカンポ・デイ・フィオーリ広場で火刑に処されたジョルダナーノ・ブルーノ(イタリアの哲学者。宗教の不寛容を批判し、民族間の平和を説いたが、その主張は当時のローマ教会より異端思想とされた)や、あらゆる時代あらゆる場所で不当に命を奪われた老若男女たちと同様に。アマゾンに燃え広がる炎は、はっきりとそうは見えないが、おそらくは全人類にとって致命的なものとなるだろう、「戦火」なのだ。その炎は、(自身のための)「敵」を飢餓に追い込むために、ネイティブ・アメ

リカンの集団をフェンスで囲い、バイソンを絶滅させ、彼らの文化が尊重し、敬意を払ってきた自然を破壊したヤンキーの戦略を想起させるものであり、イングランド、スコットランド、アイルランドで進められた「エンクロージャー」（13～19 世紀の共有地の民営化。農民を都市に移住するよう強制し、「安価な労働力」に変容させた）も同類だ。だからこそ、今、ここに呼びかける。

歴史が（またも）繰り返される前に、
この戦争を止めようではないか。

Giovanni Marinelli ジョバンニ・マリネッリ

ITT Marco Polo、イズロット、フィレンツェ

2023 年 4 月

追記

Desertum fecerunt et pacem appellaverunt

「砂漠を築いて、それを平和と呼ぶ」

これは、タキトゥス⁴の『Agricola アグリコラ』に紹介されるカレドニア⁵連合の族長カルガクスによる演説の一節、Ubi solitudinem faciunt, pacem appellant 「**廃墟を築いて、それを平和と呼ぶ**」を踏襲したものである。ローマ軍との戦いに向け、配下の軍勢を奮起させる意図を持ってなされたとする演説では、ローマ人によるブリタンニア侵略を次のように評している。

⁴ Publius Cornelius Tacitus プブリウス・コルネリウス・タキトゥス（55年～117または120年頃）ローマの歴史家、雄弁家であり、元老院議員。ラテン文学の歴史編纂分野における権威である。

⁵ 現在のスコットランドにあたる地域。

「世界の盗人として、何一つ逸することのない略奪で大地を萎えさせておいて、彼らは海原をも漁る。敵が裕福なら強奪の、貧しければ制圧の欲にかられる。東国であれ西国であれ、彼らの欲は満たせない。人々の中であって彼らのみが、富と貧困を等しく熱望する。盗みと殺戮と略奪に、彼らは帝権という偽りの名を冠する。そして、廃墟を築いて、それを平和と呼ぶ」

(『アグリコラ』第30節)

以下は、長い間シッティング・ブル⁶の言葉とされてきたが、ウィキペディアは現在、その真贋に疑義を呈している。誰が最初に言ったかはさておき、美文であり、真理であることがいずれ明らかになると思われるため、ここに紹介しておく。

⁶ 「シッティング・ブル」の名で知られているが、「タタンカ」は「バイソン」の意であるため、正しくは「シッティング・バイソン」である。

「最後の川を汚し、最後の木を切り倒し、最後のバイソンを狩り、最後の魚を捕まえて初めて、彼らは銀行に預けた金が食べられないことに気づくだろう」

Sitting Bison シッティング・バイソン

(1831年～1890年：ラコタ・スー族ハंकパパ族の戦士。本名はタタンカ・イヨタケ)